礙車雲起風欲作。　礙車の雲は起つて、風、作らむと欲す。
獨望鍾山喚寶公。　獨り蔣山を望んで寶公を喚ぶ、
林間白塔如孤鶴。　林間の白塔、孤鶴の如し。
寶公骨冷喚不聞。　寶公、骨冷かにして、喚べども聞こえず、
却有老泉來喚人。　却つて、老泉の來つて人を喚ぶあり。
電眸虎齒霹靂舌。　電眸虎齒、霹靂の舌、
爲余吹散千峯雲。　余の爲に、吹き散す千峯の雲。
南行萬里亦何事。　南行萬里、亦た何事、
一酌曹溪知水味。　一たび曹溪を酌んで、水味を知る。
他年若畫蔣山圖。　他年、もし蔣山の圖を畫かば、
爲作泉公喚居士。　爲に泉公を作して、居士と喚ばしめむ。

「暴風の候、礙車雲あり」と記し、王直方詩話に「舟人、雲を占し、礙車の若くなれば、急に之を避く」とある。【二】寶公　南史隱逸傳に「釋寶誌、宋の太始中に於て、鍾山に出入し、都邑に往來し、未兆を預言し、仙の心智を識り、一日中、分身して所を易ふ、遠近驚赴す」とあり、僧史に「寶公大士、諱は寶誌、手足鷹爪。初め建康朱氏の婦、兒の屢巢中に啼くを聞き、樹に棲して之を得、養うて以て子となす。七歲、鍾山の僧儉に依つて出家す。梁の天監の初、錫を鍾山に卓つ。十三年入滅、定林寺前の獨龍岡に葬り、塔五層を建て、塔前に開善寺を建つ、王筠に敕して碑文を撰ぜしむ」とある。【三】禪　禪宗の一派。

霹靂舌　韓愈の遣瘧鬼の詩に、詛師毒日牙、舌作霹靂雄とある、霹靂は、雷霆の如く音を發して舌が動く。【四】曹溪　禪宗の一派。
【五】蔣山　卽ち鍾山、南京の郭外に在る。輕門略に「建康の北十餘里、鍾山あり、別名金山、漢末、秣陵尉蔣子文、賊を討つて戰亡し、靈、山に發す、因つて蔣侯廟を建つ、故に世號して蔣山と曰ふ」とある。

【題義】傳燈錄に「蔣山の佛慧禪師、名は法泉、隨州時氏に生まる。出家して博く羣書を極め、過目、誦を成す、雅泉萬卷と號す。建康中、鍾山に住む」とある。この詩は、六月七日、金陵、卽ち今の南京に舟を泊した處が、風に阻まれて、逗留して居ると、鍾山に住む法泉といふ坊さんからの手紙を受取つたから、その挨拶として、これを寄せたといふのである。

【詩意】今日、大江の邊に於ては、天色模樣が頗る惡く、礙車の形せる雲が出て、やがて、風の起らんずる景色。ひとり、鍾山を望んで、古しへの寶誌上人を呼び起さうとすれば、林間の白塔が、孤鶴の如く見える。寶誌上人は、遠き昔に死んで、その骨、すでに冷かに、呼んだ處で、聞こえもせず、却つて、老いたる法泉上人の處から手紙が來た。上人は、電光の如き目を剝き出し、虎の樣な齒を食ひしばり、霹靂を鳴らす舌で、呪文を唱へて、予の爲に千峰の雲を吹き散せしめたので、その厚意は、まことに辱い。予は、これから、萬里の南方に往くが、それは、格別の事でもなく、それよりも、一たび曹溪の流を汲んで、水味を知り、つまり、禪の妙趣に到達したいと願ふばかり。そこで、他年、鍾山の圖を畫いたならば、見事に、この法泉上人を感服せしめ、予を居士と呼んで貰はうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「起勢離奇」といひ、又、却有二老泉來喚人の數句を評して「電過飈廻、筆力橫絕」といつて居る。

贈清涼寺和長老

清涼寺の和長老に贈る

代北初辭沒馬塵、
江南來見臥雲人。
問禪不契前三語、
施佛空留丈六身。
老去山林徒夢想、
雨餘鐘鼓更清新。
會須一洗黃茆瘴、
未用深藏白氎巾。

【字解】〔一〕代北　即ち河北、定州を云ふ。〔二〕前三語　從一の廣清涼傳に「大歷中、禪無著、五臺山に至り、一寺を見、僧に問ふ、この處、衆、幾何あるか。答へて曰く、前三三、後三三、と。無著、對ふるなし。僧曰く、すでに解せざれば、宜に須らく速やかに去るべしと。首を回らすに、寺、即ち隱る。無著、愴然として傷あり、云ふ、言下不知聞佛印「回」頭只見舊山巖」とある。〔三〕丈六身　袁宏の後漢紀に「西域天竺佛像を畫かしめ、紹聖元年六月九日、像成つて、金陵清涼寺に來安す」とある。〔四〕黃茆瘴　房千里の投荒記に「南方六七月、老茆黃に枯るる時、瘴、大に發す、土人呼んで黃茆瘴と爲す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。金陵梵刹志に「石頭山清涼寺は、府城の西、清涼門內古清涼山に在り、吳國に佛寺あり、長丈六尺、黃金色、頂中日月の光を佩びて、變化方なく、所として入らざるなくして、大に羣生を濟ふ」とあり、袁註に「水集、阿彌陀佛贊の後に云ふ、蘇軾の妻王氏、京師に卒す、遺言して、受用するところを捨て、その子、邁・迨・過をして爲に阿彌陀佛像を畫かしめ、紹聖元年六月九日、像成つて、金陵清涼寺に來安す」とある。【題】黃茆瘴　房千里の投荒記に「南方六七月、老茆黃に枯るる時、瘴、大に發す、土人呼んで黃茆瘴と爲す」とある。

【詩意】予は、代北定州の馬を沒するばかりなる邊境の黃塵を遯れ、ここに江南に來り、平生雲に臥する老師に參謁した。禪を問うた處で、前三三といふ樣な語は分からぬが、亡妻の爲に、佛に施して、丈六の阿彌陀畫像を此寺に留めて置くことにした。老後、山林は、徒に夢想に歸し、そこに隱棲するのは、何時とも分からず、雨あがりの日には、鐘鼓の響さへ、殊に清新に聞こえる。ここに來た上は、しばし落ち付いて、黃茆瘴を一洗すべく、さうすれば、白氎巾で深く此身を包み隱すにも及ばぬであらう。

予前後守倅餘杭凡五年、秋夏之間、蒸熱不可過、獨中和堂東南頰、下瞰海門、洞視萬里、三伏常蕭然也、紹聖元年六月、舟行赴嶺外、熱甚、忽憶此處、而作是詩

予、前後餘杭に守倅たること凡そ五年、秋夏の間、蒸熱過ごすべからず。獨り中和堂の東南頰は、海門を下瞰し、萬里を洞視し、三伏常に蕭然たり。紹聖元年六月、舟行して嶺外に赴き、熱甚しく、忽ち此處を憶うて、この詩を作る

(一)忠孝王家千柱宮。　忠孝の王家、千柱の宮、
東坡作吏五年中。　東坡、吏と作る五年の中。
(二)中和堂上(三)東南頰。　中和堂上東南の頰、
獨有人間萬里風。　獨り人間萬里の風あり。

宮室の房を頰といふ。蓋ほ人の頰顴のごときなり」とある。

【題義】西湖游覽志に「中和堂は、鳳凰山下に在り、暑月最も快」とある。題の意味は――予は、餘杭、卽ち杭州に守倅となりしこと、前後合せて五年、夏秋の間は、蒸し暑くて、過ごすことが出來ぬが、唯だ中和堂の東南房のみは、海門を俯瞰し、萬里を洞視し、三伏の間でも、常に蕭然として居る。ここに紹聖元年六月、舟で嶺外に赴かむとし、暑氣甚しきに因つて、ひよッと中和堂を思ひ出して、この詩を作つたといふのである。

【詩意】中和堂は、忠孝を以て知られた錢氏が建てたので、千柱の駢立する大建築。予は、杭州に吏たること五年、度度そこに游びに往つた。その中和堂の東南の房のみは、他所と違つて、萬里の風が自由に吹き込んで、まことに涼しかつたから、今に忘れ兼ねて居る。

【餘論】紀昀の評に「太だ率」とある。

【字解】(一)忠孝王家　錢氏を云ふ、王註に「吳越王錢俶、太平興國三年を以て、擧族歸朝、卒して忠懿と謚す」とある。(二)中和堂　題義の項に注してある。(三)東南頰　王註に「頰の字、內地の常語、

慈湖夾阻風五首

捍索桅竿立嘯空。　捍索桅竿、立つて空に嘯く、
篙師酣寢浪花中。　篙師、酣寢す浪花の中。
故應菅蒯知心腹。　故らに應に、菅蒯、心腹を知るべく、
弱纜能爭萬里風。　弱纜、能く爭ふ萬里の風。

【題義】元和郡縣志に「慈湖は、當塗の北六十五里に在り」と見え、陳克の東南防守利便に「慈湖夾は、太平州界に在り、建康に至る七十五里、石季龍、歷陽に寇せしとき、趙嗣、慈湖に市す」とある。夾は、入江、もしくは港の義。又、東坡の任德翁に與へた書に「某、磁湖夾に在つて、風に阻まるるすでに累日、今日、風亦た甚だ順ならず、且つ寸進前み去る」とあつて、この詩と互證することが出來る。

【詩意】繩で堅く引ッ張られた帆柱は、立つたまま、風に嘯いて居るが、船頭は、平氣で浪立ち騷ぐ中に、ぐうぐうと寢つて居る。菅蒯は、船客の心腹を知り拔いて居ると見え、弱い纜ながら、萬里の風と爭ひ、しッかり舟を繫ぎ止めて、覆沒の患の無い樣にして居る。

此生歸路轉茫然。　この生、歸路、轉た茫然、

【字解】(一)捍索　桅竿の兩邊の索、卽ち帆柱を引ッ張つてある繩。(二)菅蒯　前に將ゝ至ゝ渦口ゝの詩中に見ゆ、水草の名で、これで綱を編ふのであらう。

無數青山水拍天。　無數の青山、水、天を拍つ。
猶有小船來賣餅。　猶ほ小船の來つて餅を賣るあり、
喜聞墟落在山前。　喜び聞く、墟落の山前に在るを。

【詩意】わが生の歸路は、何處に在りや、茫然として知るべからず、無數の青山は、遠くに見え、大江の水は、逆卷いて、波は天を拍つばかり。しかし、小舟で餅を賣りに來るものがあつて、その者の話で、山の前に村里があるといふことを聞いて、稍や心強く覺えた。

【餘論】紀昀は「當前の寥落、知るべし」といつたが、王文誥は「然れども、この二句は、乃ち風に遇うて船を泊し、初めより、頭路人語を辨せず、惟だ江湖に老いたるもの、これを知る、眼前の寥落を道ふに非ざるなり」といつて居る。

我行都是退之詩。　わが行、すべて是れ退之の詩、
眞有人家水半扉。　眞に人家、水、半扉なるあり。
千頃桑麻在船底。　千頃の桑麻、船底に在り、
空餘石髮掛魚衣。　空しく石髮を餘して、魚衣を掛く。

【字解】〔一〕退之詩　韓愈の宿曾江口の詩に雲昏水奔流、天水漾相開、三江減無口、其謹識涯圻、暮宿投民村、高處水半扉とある。〔二〕石髮　綱獅拜草に「澤、石衣」註に「水苔なり、一名石髮、江東、これを食ふ」とあり、查註に「西陽雜俎、南中水底に草あり、石髮の如し。毎月三四日、はじめて生じ、八九以後に至らば、采つて食ふべし、に「說文、虛は大邱なり、古しへは九夫を井となし、四井を邑となし、四邑を邱となし、邱、これを虛といふ」とある。

月盡くるに及んで、悉く爛れ、月に隨つて盛衰するものに似たり」とある。すると、水中の苔といふものの、藻の一種であらう。〔三〕魚衣　ただ魚といふに同じ。

【詩意】わが今次の旅行中に見るところは、すべて、韓退之の詩の通りで、洪水は、人家の扉の半ば位に及んで居る。されば、桑麻を植ゑた千頃の畑は、すべて船底に在る樣な次第、岸邊には、藻が殘つて居て、それに魚が引ッかかつて居る。

【餘論】紀昀は「亦た致あり」といつて居る。

日輪亭午汗珠融。　日輪亭午、汗珠融なり、
誰識南訛長養功。　誰か識らむ、南訛長養の功。
暴雨過雲聊一快。　暴雨過雲、聊か一快、
未妨明月却當空。　未だ妨げず、明月の却つて空に當るを。

【字解】〔一〕亭午　亭は停まる。太陽が其地の子午線に停まる、卽ち丁度その地に來ること。〔二〕南訛　書經に「申れて羲叔に命じ、南郊に宅して、南訛を平秩す」とあつて、その註に「訛は化なり、掌夏の官、南方化育の事を平秩す」とある。ここでは南方の義。

【詩意】日輪が丁度、その地に來ると、眞晝の暑さは、汗の珠を流れしめるが、南方を氣長く敎養する功績は、誰か識別すべき。暴雨と過雲とは、一寸爽快を覺え、加之、すでに晴れるから、夜、明月の空に當ることを妨げない。

309
65

【餘論】紀昀の評に「次句、腐」とあり「末二句、寓意」とある。

臥看落月横千丈。　臥して看る、落月の千丈に横ふを、
起喚清風得半帆。　起つて清風を喚んで半帆を得たり。
且竝水村敧側過。　且つ水村に竝んで、敧側して過ぐ、
人間何處不巉巖。　人間、何の處か巉巖ならざらむ。

【詩意】臥して見れば、落月は、千丈の高い處に横はり、起つて清風を呼べば、やッと帆に半ばなる位。そして、舟は水村と平行して、傾きながら走り過ぎ、いかにも、危險らしく見えるが、人間、何處か巉巖ならざるべき、さう思へば、格別おそろしくもない。

【餘論】紀昀は「末句、太だ露」とある。乾隆御批に「荒灣旅泊、却つて卽事を寓し得て、皆喜ぶべし。この數詩を讀まば、以て塵襟を開豁するに足る」とあるは、卽ち總評である。

終